

シビルウエディング・
ミニスターが語る

心にかける挙式

この式が挙げられたのは、
2007年6月でした。

何らかの事情で結婚式を挙げ
なかった夫妻が12歳の長男から「ぜひ結婚式をやって」と熱心に勧められ、挙式の申し込みにきました。

相談を受けた私がシビルウエディングの挙式を説明したところ、自分たちが考えていたものに近い様式と内容だということで、夫妻は即決されました。

ただ、仕事の都合で事前のリハーサルが出来ないとの事なので、その場で式次第の説明をしてから当日用意するものを告げました。それから祝辞に織り込むための、夫妻のバックグラウンドなどを聞き取り、リハーサルは挙式の前に行うということで、その日の打ち合わせを終えました。

こういうケースは初めてだったので、ミニスターを務める私には若干の不安がありました。が、祝辞の原稿を書き終えた時点で、これはよい式になるにちがいないと確信し

ました。

挙式当日、ふたりに式の流れを説明してからリハーサルを行いました。10歳の長女と4歳の次男は、モーニング姿の父親とウエディング・ドレス姿の母親を見てキョトンとしていましたが、両親に結婚式を勧めた長男は、しっかりと両親の顔を見つめてから、嬉しそうに何度もうなずいていました。

「準備した指輪をお出しください」と

訊くと、長男が持っているとのことなので、彼に同じことを言いました。

彼は、ポケットから恥ずかしそうに指輪を出しました。

見るとビーズで出来たおもしろいような指輪です。「これは？」と訊くと、彼は、「お父さんとお母さんの指の大きさを測って、ボクが作りました」

と、赤ら顔で答えます。

私の胸は、熱くなりました。リハーサルを終え、本番になりました。子どもたちは入場してくる両親を、初めは照れくさそうに眺めていましたが、式が進むにつれて3人は笑顔になりました。

両親は、息子の手作りの指輪を大事そうに交換してから、ベールを上げてキス。そのシーンになると、子どもたちは顔を真っ赤にしました。

誓約書署名は、両人、長男と順に署名して、次男の番になりました。4歳の彼は、こ

指輪の交換や姉が弟を助けて署名する様子を見ていると、両親の愛情に包まれ育ってきた温かい家庭が十分に想像できました。

最後に、晴れて夫婦の契りを終えた両親から子どもたちひとりひとりに感謝の気持ちと、「これまでどおり夫婦として、親として君たちと一緒に幸せな家庭を築いていくよ！」の、誓いの言葉が述べられたときには、私は思わず目頭を押さえました。

私はこの感動を、急遽、用

しばしばもありましたが、私自身がこれほどまでに感動した挙式は初めてでした。

この感動を忘れずに、これからもミニスターとしての自分を磨き、新郎新婦や列席者に慶んでいただけるような挙式をつねに心がけながら、シビルウエディングの普及に尽力したいと思います。

最後に祝辞の原稿作についてひとこと……2人から事前には聴取した事を織り込んで作成しますが、1日数組あるときは原稿を間違えないよう神経を使います。

12歳長男の手作りビーズ指輪で
再認識された家族愛

の日のために姉に教えてもらい自分の名前を一生懸命練習してきました。が、晴れの舞台でいざ署名するとなるとあがってしまい、途中で書けなくなりました。彼の筆は止まり、泣き出してしまいました。

そのときすかさず、名前を書き方を教えた姉が出てきて、弟に手を添えてなんとか名前を書くことができました。

司式者の席から、ビーズの

意した祝辞の中に盛り込みました。そのため、毎回「簡潔」を心がけて準備してきた祝辞が少し長めになってしまいました。

私は、これまでシビルウエディング・ミニスターとして500組近くの挙式を司ってきました。新郎新婦や両親、列席者から「感動的な良い式でした」の言葉を頂くことが



シビルウエディング・ミニスター
横田良治氏

(よこた・よしはる 1950年広島県生まれ。2003年シビルウエディング・ミニスターの資格取得。メルパルク広島に勤務)